

# 経営者のための数楽講座

## 第8回

## クラスを立て直す“数楽”

有田 八州穂 【杉並区立杉並第三小学校】

### 子供たちと関わり30年

小学校の現場で子供たちと格闘して30年になる。子供たちと本音で向き合えるエネルギーがなくなったら、引き時だと決めている。そういう筆者の気持ちを見通してか、このところ学級崩壊のクラスの再建処理で後釜を引き受けることが多い。年を取って、子供たちに向かう自分の肩に余力が入らなくなったことを感じる。つまり、淡々とありのままに向き合おうと。

筆者は、大学では、人間臭さから最も離れていると思われた「数学」を学んだ。そこで、日本数学協会の会長・上野京都大教授や副会長・岡部埼玉大教授から、本物の数学を少し嗅がせてもらったが、真に理解できる頭もなかった。

小学校の教員になったのは、泥臭い人間臭さが自分の性に合っているように思えたからで、現場に入ってから、数学ではなく、人間臭い教育相談という「問題を抱えた児童と向き合うには」という方面のことを多くやっていて、数学の数の字もなかった。しかし、30年たって、また、数学に回帰してきたように思う。それは、問題を抱えた子供や学級崩壊の子供たちの本音と向き合うようになってからのことである。

### みんな学びたがっている

企業家も会社を再建する時には、あの手この手と苦慮すると思う。私たち教員がクラスの立て直しを図ろうとする時も同じである。教育相談

をやっていた筆者は、子供たちの気持ちの受容とか共感とかカウンセリングの手法で向き合おうとした。しかし、それはあくまでも手段的なもので、本音と正面から向き合うものではないことを、いやというほど味わわされることになる。筆者自身、カウンセラーでも遊び相手でもなく、どうしようもなく「教員」なのだ。

筆者がたどりついた再建策は、何のことはない、ただ、「授業をする」という当たり前の事だった。授業を通して、「学びの面白さに子供たちを巻き込む」のである。同時に、親も巻き込んでいけることが分かってきた。

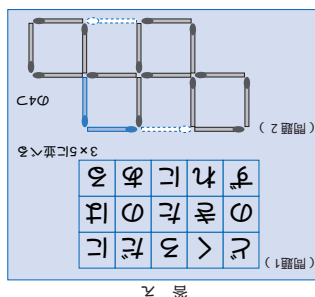
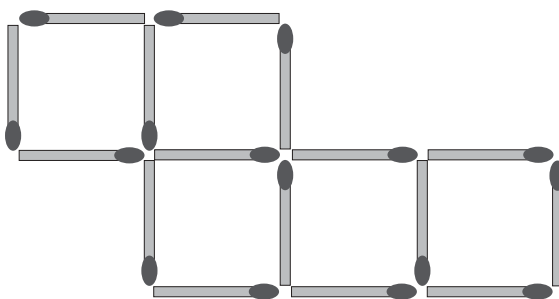
巻き込み策というのは、まず、「数

楽」であった。つまり、「算数は面白いぞ」を味わわせること。すべての学びに飽きていた6年の学級崩壊の子供たちに、算数の授業の冒頭15分ぐらいを、パズル的な「おもしろ算数」に充てたのである。その時、子供たちから、「どんな子も学びたがっている」、「どの子も頭を使うことが好きである」ということを教えてもらった。ここには、学力低下からもっとも離れた態度がある。そして、この「おもしろ算数」は、親の「数楽」をも呼び起こすのである。

筆者が出した問題は、300題くらいにはなる。例えば次のような問題だ。さて、読者も「数楽」して、楽しんでみてはいかがだろう。

(問題1) 次の暗号を解いて宝を見つけなさい。  
「どのずくきれるたにだのあにはる」

(問題2) マッチ棒を2本だけ動かして、同じ大きさの正方形4つにしなさい。  
重ねたり、取り去るだけだったり、はんぱが出てもいけません。



ありた・やすほ

1949年生まれ。杉並区立杉並第三小学校教諭。著書に「文科系学生のための数学教室 1から思いつくまで」(共著・有斐閣)日本数学協会幹事。

このコーナーは日本数学協会(<http://sugaku-bunka.org/>)の役員らが輪番で執筆しています。